報告書作成に当たっての注意事項

<table>
<tr><td rowspan="2">基本設定</td><td>計算ルート</td><td>必ず「精算法ルート」を選択して下さい。</td><td>診断プログラム
P.19</td></tr>
<tr><td>モジュールのとり方</td><td>モジュールは910㎜が初期値です。画面上では実線グリッドが910㎜ 間隔、破線グリッドが 455 ㎜間隔で、455㎜ が最小入力可能寸法です。303 ㎜の入力が必要な場合は、モジュールを303㎜ 又は606㎜に設定して下さい。
印刷制限により、40×40 モジュールを最大サイズとして下さい。一辺が 20 モジュールを超えると図面の印刷サイズが半分に圧縮され大変見づらくなります。</td><td>診断プログラム
P.17、P.19</td></tr>
<tr><td rowspan="5">建物概要</td><td>地盤による割増</td><td>非常に悪い地盤の割増(1.1～1.5)を行うときは、その数値を用いた根拠を示す必要があります。漠然と「悪い」程度では採用しないで下さい。</td><td>診断プログラム
P.21、P.49</td></tr>
<tr><td>形状割増係数</td><td>2階の短辺の長さが6.0m未満の場合は、1階の必要耐力に下表の割増係数を乗じた値とします。ただし、1、2階とも短辺の長さが6.0m未満の場合は、割増係数の大きい方を使用します。
なおＬ型建物のような場合、全長ではなく最短辺長さを用いて下さい。
<table><tr><td></td><td>4.0m未満</td><td>4.0m以上6.0m未満</td><td>6.0m以上</td></tr><tr><td>割増係数</td><td>1.3</td><td>1.15</td><td>1.0</td></tr></table></td><td>診断プログラム
P.21、P23
耐震診断と補強方法P.29</td></tr>
<tr><td>基礎仕様</td><td>①～③は整合させて下さい。
①建物概要の基礎仕様（Ⅰ～Ⅲ）
②「建物調査シートおよびヒアリングシート」の≪基礎≫
③総合評価の【基礎】
「基礎仕様」の入力に当たっては、別掲の『既存基礎形状、補強方法、補強後の評価』を参照して下さい。</td><td>診断プログラム
P.24、P.84
耐震診断と補強方法【例題編・資料編】P.123</td></tr>
<tr><td>床仕様
接合部仕様</td><td>床仕様については別掲の『床倍率・床仕様の分類』を、接合部仕様については別掲の『一般診断法における接合部Ⅲ、Ⅳについて』を参照して下さい。</td><td>耐震診断と補強方法P.48、P.98</td></tr>
<tr><td>積雪深さ</td><td>県内は北部や山間地域で多雪地域が広範囲で設定されているため、積雪深さ(㎝)の入力に注意して下さい。
多雪区域では積雪による建物重量増加のため地震力が大きくなること、積雪による柱頭・柱脚接合部の抑え込み効果の増加を考慮して、無積雪時の評点と積雪時の評点の両者を求め、低い方の評点を当該建物の上部構造評点として下さい。
なお、多雪区域の場合、雪下ろしの状況に応じて積雪深さを100㎝まで減らすことが出来ますが、その場合は「雪下ろしの習慣がある」旨を報告書の総合評価欄などに明記するとともに、申請者にも説明して下さい。</td><td>耐震診断と補強方法P.25、P.26</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="5">建物概要</td><td rowspan="5">建物仕様
（建物の重さ）

建物仕様
（建物の重さ）</td><td colspan="3">次の分類表を参照して「建物の重さ」を決定して下さい。選択された「屋根の仕様」よりも「壁の仕様」の方が重い場合は、「壁の仕様」の分類で(建物の重さ)を決定して下さい。</td><td>診断プログラム
P.25</td></tr>
<tr><td>分類</td><td>屋根の仕様</td><td colspan="2">壁の仕様（参考）</td></tr>
<tr><td>軽い建物</td><td>石綿スレート板、鉄板葺など</td><td colspan="2">ラスモルタル壁(外壁のみ)＋ボード壁</td></tr>
<tr><td>重い建物</td><td>桟瓦葺など</td><td colspan="2">土塗り壁（外壁のみ）＋ボード壁</td></tr>
<tr><td>非常に重い建物</td><td>土葺瓦屋根など</td><td colspan="2">土塗り壁（外壁・内壁とも）</td></tr>
<tr><td>外周</td><td>外周線のとり方</td><td colspan="3">上階の外周で囲まれた領域はすべて下階の外周で囲まれた領域に含まれなければなりません。例えば、2 階のオーバーハング部は 1 階の外周に含まれなければなりません。
また、外部の玄関ポーチや屋根と一体となった庇部など、2 階床レベルで外周に横架材が廻っている部分は 1 階の壁量計算用床面積に含まれるため、外周入力はこれらの部分を含むよう入力して下さい。</td><td>診断プログラム
P.28
耐震診断と補強方法【例題編・資料編】P.130</td></tr>
<tr><td>劣化度</td><td>存在点数と
劣化点数</td><td colspan="3">建物に該当部位がある場合は、全て存在点数欄にチェックを入れて下さい。その上で、構造耐力上支障がある劣化事象のある部位には劣化点数欄にチェックを入れて下さい。
劣化低減係数は劣化事象の数に関わらず 0.7 が下限値となります。また、劣化改善後の劣化低減係数は、現況診断時の劣化低減係数が 0.9 未満の場合 0.9 が上限値、現況診断時の劣化低減係数が 0.9 を超えていた場合にはその値が上限値となります。</td><td>診断プログラム
P.26
耐震診断と補強方法 P.51</td></tr>
<tr><td rowspan="7">壁の入力</td><td>開口壁</td><td colspan="3">掃出し型開口壁
垂壁（高さ 360 ㎜以上）のみを有する開口壁
窓型開口壁
垂れ壁と腰壁を有する開口壁（開口高さ 600 ㎜～1,200 ㎜程度）</td><td>耐震診断と補強方法 P.35</td></tr>
<tr><td>壁の個別入力</td><td colspan="3">開口壁・無開口壁に関わらず同一仕様の壁が連続している時は、一括入力せず柱で挟まれた壁ごとに個別入力して下さい。</td><td></td></tr>
<tr><td>2 重張りの耐力</td><td colspan="3">原則的に軸組に直接取り付けられている、または胴縁を介して取り付けられている面材のみ耐力が有効となりますので、2 重張りによる合算耐力の入力はしないようにして下さい。</td><td></td></tr>
<tr><td>階段室の壁</td><td colspan="3">階段部分で壁の面材が分断される場合は入力しないで下さい。</td><td></td></tr>
<tr><td>下屋に接する壁</td><td colspan="3">下屋に接しているために外壁の面材が途切れる場合は入力しないで下さい。</td><td></td></tr>
<tr><td>接合部仕様の
自動アップ</td><td colspan="3">補強しない壁の両端壁が補強壁の場合は、補強壁の接合部仕様に応じて補強しない壁の接合部仕様を調整して下さい。</td><td></td></tr>
<tr><td>その他(別添仕様)</td><td colspan="3">プルダウンメニュー以外の仕様面材や外面・芯への入力可能数を超える面材がある場合には〔60 その他（別添仕様)〕を使用して入力して下さい。</td><td>診断プログラム
P.33</td></tr>
</table>

壁の入力	耐力 0kN/m の壁	60 cm未満の無開口壁は耐力評価することが出来ませんので、0kN/m の短壁として入力して下さい。また、開口部に挟まれた耐力評価出来ない無開口壁は計算上開口壁とみなされますので必ず 0kN/m の壁として入力して下さい。	診断プログラム P.38
	不明壁	不明壁は補強計算時に耐力評価出来ませんので、現況診断時から不明壁の仕様を特定して耐力を与えるか、安全側の 0kN/m の壁として入力して下さい。	診断プログラム P.32、P.37
	有効壁長	筋かいの場合は 90 cm以上、面材の場合は 60 cm以上の無開口壁として入力して下さい。	診断プログラム P.38
	基礎の補強	耐力壁の耐力を上げる場合は引き抜き金物の耐力を上げる計画として下さい。また、そのために基礎が不安な場合には基礎の補強を計画して下さい。RC 造の基礎とすることが最善の策ですが、そのような余裕がない時には、個々の耐力壁の外力負担を減らし、無筋コンクリート造の基礎に過大な入力が生じないように計画して下さい。	耐震診断と補強方法 P.127 耐震診断と補強方法【例題編・資料編】P.124
総合評価	その他注意事項	【その他注意事項】欄には、診断結果または補強計算結果について工学的な見地からコメントを記入して下さい。	
	主催者	『公共団体（滋賀県)』と記入して下さい。	
	講習修了番号	耐震診断員の登録番号を記入して下さい。	
平面図（共通）	標準平面図	一般診断法による診断プログラム事例から標準的な「現況平面図」および「補強計画平面図」を作成しましたので参考にして下さい。極力申請者が理解し易いような構成として下さい。	
	方位	方位を記入して下さい。	
	通り芯番号	Wee 壁配置図の通り芯番号は現況平面図、補強計画平面図にも使用して下さい。	
	重心・剛心 偏心率	重心・剛心の位置を明示して下さい。また重心・剛心・偏心率データも併せて明示して下さい。	
	2 階位置	2 階建の場合、対角線等によって 2 階の平面位置を 1 階平面図に明示して下さい。	
	開口壁種別	「窓型開口壁」「掃出し型開口壁」を 0.3、0.6 等の凡例によって明示して下さい。(方法 1)	
	筋かい	筋かいの種類ごとに、凡例によって明示して下さい。	
現況平面図	写真の撮影位置	現況写真の番号、撮影位置、撮影方向を記入して下さい。	
	柱寸法・垂壁	「柱の寸法」「垂壁」を凡例によって明示して下さい。(方法 2)	
	建物概要	建物の屋根仕様、基礎仕様、接合部仕様、外壁仕上げ、内壁仕上げを明記して下さい。	
	建物の劣化事象	建物部位に劣化事象がある場合はその概要を明記して下さい。	
補強計	建物概要	補強後の建物の屋根仕様、基礎仕様、接合部仕様、外壁仕上げ、内壁仕上げを明記して下さい。	
	建物の劣化改善	劣化改善がある場合はその概要を明記して下さい。	

画平面図			
	補強壁の図示	補強壁の図示は「単色による着色」「補強壁番号」「補強面材」「筋かい」程度の凡例内容にとどめ、申請者が見やすい様工夫して下さい。	
	基礎補強の図示	基礎補強の位置と仕様を凡例によって図示して下さい。補強平面図が煩雑で見にくくなる場合は別図としても構いません。	
	新設柱・建具	「新設柱」「新設建具」は凡例によって明示して下さい。	
	上部構造評点	「診断時」「目標値」「補強後」の最小上部構造評点を比較して明示して下さい。	
補強壁仕様表	基礎仕様・接合部仕様	「基礎仕様」「接合部仕様」は計算書の部材リストからもれなく正確に転記して下さい。	
	補強位置	「補強位置」は補強計画平面図から「片面補強」「両面補強」「金物のみの補強」を確認の上、セルのリストから選択して下さい。	
	長壁	補強壁の壁長が 900・1,000mm を超える場合は、長壁としてセルのリストから「○」を選択して下さい。	
	補強壁総数	各補強壁総数は概算内訳書に正確に転記して下さい。	
概算報告書	建物の規模	建物の規模は「壁配置図」の「1 階の面積」と「2 階の面積」の合計を記入して下さい。	
	診断時の上部構造評点	補強計画のみの業務の場合、改修前の上部構造評点は提供された診断当時のデータを転記して下さい。	
	「金物のみによる補強」数	概算内訳の「金物のみによる補強」数は、壁数ではなく金物を設置する柱および筋かいの本数で計上して下さい。	
	少数構面割増	補強壁数が 15 以内の場合、壁数に応じて自動的に単価割増が行われますので、箇所数欄には入力しないで下さい。	
報告書の提出	診断報告書	提出内容は以下の通りです。 ・建物調査シートおよびヒアリングシート ・自己チェックリスト ・「一般診断法」による現況診断 ・現況平面図 ・現況写真 ・その他、耐震診断員による参考資料等	
	補強計算報告書	提出内容は以下の通りです。 ・自己チェックリスト ・「一般診断法」による補強計算 ・補強計画平面図 ・補強壁仕様表 ・概算報告書 ・その他、耐震診断員による技術資料等	
	提出部数	判定会提出用に上記報告書を各 1 部提出して下さい。 訂正完了後は市町、申請者用に各 1 部計 2 部提出して下さい。 この時、診断員の押印は必要ありません。また、「建物調査シ	

		ートおよびヒアリングシート」「自己チェックリスト」の添付も必要ありません。	
	Wee の事例紹介	『一般診断法による診断プログラム』中に精算法による事例が掲載されていますが、別掲で下記資料を紹介しています。参考として下さい。 ・診断例(精算法ルート).w20 ・補強例(精算法ルート).w20 ・○○邸現況平面図 ・○○邸補強計画平面図 ・○○邸補強壁仕様表 ・○○邸概算報告書 なお、上記の w20 ファイルは CD-ROM 中の「Sample」フォルダにも入っています。	